

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 40 2011 (平成23年度) No. 2 平成23年11月30日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒187-0021 東京都小平市上水南町3-2-1文化学園大学小平キャンパス栗山研究室内 TEL：042-327-8873 FAX：042-327-8874
E-mail：kokusairikai@bunka.ac.jp Website：http://www.kokusai.com

目次

巻頭の言葉 学会長挨拶	1	特定課題研究プロジェクト報告	7
第22回研究大会のご案内	2	全国各地の研究会からの報告	9
第22回研究大会シンポジウム	3	『現代国際理解教育事典』編纂紀	10
第21回研究大会特定課題研究	4	国際委員会企画のお知らせ	11
4学会連携公開シンポジウム報告	5	理事会(各委員会等)報告	13
韓国国際理解教育学会報告	6	事務局通信	15

巻頭の言葉

高校生の国際理解—スタディーツアーを通じて

学会長 大津 和子

北海道内の高校生(10名)を同行して、2011年度はカンボジアに、2012年度はベトナムにスタディーツアーに出かけてきました。(北海道国際交流・協力総合センター主催)6月からの事前研修、8月の現地研修、数回の事後研修を経て、12月～3月に地域の学校で報告会を、最後に市民報告会を開くという、10か月にわたるプログラムです。訪問するNGOを高校生が決め、電話やメールでアポを取り、各訪問先での活動内容(ジャンケン列車、ヨサコイソーラン踊りなど)を相談して準備し、リハーサルを行いました。

カンボジアの孤児院を訪問した時のことです。高校生たちは「可哀想な子どもたちを元気にしてあげよう」と一生懸命笑顔をつくって臨んだのですが、子どもたちが笑顔で迎えてくれ、高校生の手を引っ張ってくれたり、一緒に昼食を調理したり、走り回って遊んだりして、逆に子どもたちから笑顔と元気ももらったことに気付いたのでした。

翌日マーケットでお土産を漁っていると、小さい弟をおぶった10歳くらいの男の子がやってきて、「ワンダラプリーズ」と高校生に手を差し出しました。彼女はお金を与えてはいけないと思い、逃げるようにしてバスに戻りました。バスが出発する時窓の外を見ると、その男の子が手を振っていました。その姿を見て彼女は、「なぜ自分は逃げ出したのか。なぜ1ドルあげなかったのか、自分は何十ドルもの買い物をしているのに。ひょっとしたらあの子は、私が昨日一緒に遊んでハグした子どもたちと同じような境遇なのではないだろうか。それなのに逃げてしまった」と、

やりきれない気持ちになったのです。

ベトナムで戦争博物館を訪問した時、出口で動けなくなった高校生がいました。彼は立ち居振る舞いが粗暴で意欲もなかったため、他のメンバーから批判されていたのですが、その彼が、枯葉剤の影響で目のない男性が楽器を演奏している姿に、釘付けになってしまったのです。「あの人はどんな気持ちで演奏しているのだろうか。もし自分があの人だったら人前で演奏できるだろうか。家に閉じこもってしまうだろう。あの人は、辛いけれども、ベトナム戦争のことを知ってもらいたいからだろうか。」そんなことを考えると涙が止まりませんでした。バスに戻ってからしばらく一人で泣いていました。このことがあってから、彼は仲間の批判を素直に受け入れるようになりました。

このプログラムを通じて、高校生一人一人にドラマが生まれました。自分たちの経験したこと、気づいたことや考えたことを伝えてきたのですが、予想以上に聴衆の心に響いたようで、涙ぐむ人も毎回いました。高校生たちは「また子どもたちに会いに行きたい」と話しています。日本で使われなくなった車いすを整備して運んだのですが、帰国後「飛んでけ車いす」(札幌のNGO)の活動にかかわっている高校生もいます。異なる文化や異なる状況にある人々との出会いを通じて、世界への関心を広げるとともに、自己認識を深めているのです。こうした高校生の姿を目の当たりにして、国際理解教育のもつ力を改めて実感しています。

日本国際理解教育学会第22回研究大会（埼玉大会）のご案内

日本国際理解教育学会第22回研究大会実行委員会

日本国際理解教育学会第22回研究大会（埼玉大会）の概要について、ご案内いたします。詳細については、過日お送りいたしました大会要綱「日本国際理解教育学会第22回研究大会（埼玉大会）のご案内」（学会HP上にも掲載：<http://www.kokusairikai.com/>）をご覧ください。

1. 研究大会日程：2012年7月15日(日)・16日(月・祝)

大会1日目 7月15日(日)	大会2日目 7月16日(月・祝)
9:00 受付開始	9:00 受付開始
9:30 自由研究発表	9:30 自由研究発表
12:00 昼食	12:00 昼食
13:00 総会	13:00 特定課題研究
14:00 シンポジウム	16:00 大会終了
18:00 懇親会	

2. 会場：埼玉大学教育学部（埼玉県さいたま市桜区下大久保255）

3. 埼玉大学への交通アクセス

■電車

- JR東京駅から北浦和駅まで（京浜東北線快速）：39分
- JR上野駅から北浦和駅まで（京浜東北線快速）：33分
- JR新宿駅から南与野駅まで（埼京線）：34分
- JR池袋駅から南与野駅まで（埼京線）：29分
- JR大宮駅から：北浦和駅まで7分／南与野駅まで7分

■バス経路

- JR京浜東北線「北浦和駅」西口から
 - ・「埼玉大学」行バス（終点下車）約15分 190円
- JR埼京線「南与野駅」から
 - ・北入口バス停「埼玉大学」行（終点下車）約10分 170円
 - ・西口バス停「志木駅東口」行（「埼玉大学」下車）約10分 170円
 - ・西口バス停「埼玉大学」行き（終点下車）約10分 170円
- 東武東上線「志木駅」東口から
 - ・「南与野駅西口」行（「埼玉大学」下車）約25分 240円

4. 大会参加費・懇親会費

- ①大会参加費：
 - ・事前振込：一般 3,000円、学生・院生 2,000円
 - ・当日：一般 3,500円、学生・院生 2,500円
- ②懇親会費：5,000円
- ③昼食：大学構内のコンビニエンスストア（LAWSON）や、近隣のコンビニエンスストア（セブンイレブン）、近隣の飲食店をご利用ください。生協食堂は営業していません。弁当は販売していません。

5. 公開シンポジウム

本大会では、会員の大会参加の機会を拡大し、研究交流を活発にするために、三つのミニシンポジウムを設定します。

■シンポジウムA：今こそ教科教育における国際理解教育を

コーディネーター：中山京子（帝京大学）

趣旨：総合的な学習の時間において国際理解教育の実践が広がってきたが、時数が削減され「学力」重視傾向の中で、今こそ教科学習における国際理解教育の日常的な取り組みを充実させることが求められる。本シンポでは、英語（含む英語活動）、音楽、技術科などにおける実践を共有し、小中教科学習における国際理解教育の可能性を検討する。

■シンポジウムB：国際理解教育実践における新しい検証・評価の方法を探る

コーディネーター：成田喜一郎（東京学芸大学）

趣旨：あなたは、国際理解教育実践の検証・評価に悩んではいないか。本ミニシンポでは、今、国際理解教育実践がいかなる方法で検証・評価されているのか現状と課題を踏まえ、評価はだれのためにあるのかという本質的で根源的な問いを共有しつつ、これからの検証・評価はいかにあるべきか具体的な試行・実践事例をもとに考えたい。

■シンポジウムC：シティズンシップからシティズンシップ教育へ

コーディネーター：藤原孝章（同志社女子大学）

趣旨：国際理解教育学会では、特定課題研究として「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（紀要17号）が取りあげられた。これをふまえ、シンポでは、「学習の課題としてのシティズンシップ教育」を取りあげ、次代を担う若手研究者による提案と議論によって、プロジェクト研究の深化と国際理解教育の新動向を探ってみたい。

6. 特定課題研究：文化的多様性と国際理解教育

コーディネーター：横田和子（早稲田大学）

趣旨：当プロジェクトでは、「文化的多様性」という多文化共生社会に欠くことのできない概念を主題に、とりわけ「身体性」や「場」の概念などに着目することでみえてくる国際理解教育の学びの課題と可能性について模索して参りました。大会ではこれまでの研究成果を踏まえつつ、会員の皆様と議論を深めたいと思います。

7. 大会参加費・懇親会費振込先：ゆうちょ銀行

①講座記号番号：00130-6-639430

②加入者名：国際理解第22回大会事務局

8. その他

■抄録原稿提出締切：2012年5月31日（木）必着

【郵送のみ】

■大会参加申込締切：2012年6月29日（金）

【郵送またはE-mail添付】

■大会参加費等振込期日：2012年6月29日（金）同封の振込用紙

※当日の受付は混雑が予想されますので、事前振込にご協力いただきますよう、お願い申し上げます。期日を過ぎて振り込みされた場合は、必ず「振込受領書」などの振り込みを証明できるものを受付でご提示下さい。振り込みが確認できない場合は、当日大会参加費をいただくこともありますので、ご了承下さい。

（文責：桐谷正信）

大会シンポジウム A

今こそ教科教育における 国際理解教育を

帝京大学 中山 京子

総合的な学習の時間において国際理解教育の実践が広がってきたが、時数が削減され、いわゆる「学力」重視傾向の中で、今こそ教科学習における国際理解教育の日常的な取り組みを充実させることが求められる。シンポジウム A では、英語（含む英語活動）、音楽、技術科などにおける実践を共有し、小中高の教科学習における国際理解教育の可能性を検討する。

以下に当日のパネリストと発表の概要を紹介させていただく。

●英語科教育における国際理解教育：地球的市民の育成をめざして（奈良女子大学附属中等教育学校 南美佐江）
英語は、多様な文化、価値観を持つ人々と良好な関係を築くために必要な「国際共通語」であり、英語教育はWTC（Willingness to Communicate：他者との関係性を築くために対話する意思）を育てることを目的とすべきである。WTCに大きく関係する、学習者の情意的側面を重視し、地球市民の育成をめざした英語教育のあり方を考えたい。

●国際理解教育の視点でとらえ直す音楽科の授業

（東京学芸大学附属世田谷小学校 居城勝彦）

小・中・高等学校における音楽科の授業で取り扱われている楽曲は、日本や世界の諸地域の音楽である。それら楽曲そのものについての学習も大事にしながら、それぞれの音楽が人々の営みの中ではぐくまれた音楽文化であるという視点でとらえ直すことで、国際理解につながる授業は可能となる。

●ものづくりとICTを通して学ぶ国際理解教育

（立命館守山中学校・高等学校 木村慶太）

技術・家庭科は、すべての教科の中で最も「暮らし」に密着した教科である。輸入される材料や各国の生活用具の製作を通して自文化と異文化を比較し考察することができる。またICTの授業では、マルチメディアの素材を選択することで文化や風土の学びを広げることが可能となる。自身の実践例を挙げるとともに、小学校図画工作との連携についても合わせて考えを深めたい。

当日は、パネリストの三方による提案をもとに、教科教育における日常的な取り組みについて、参加される皆様と深めていきたい。

大会シンポジウム B

国際理解教育実践における 新しい検証・評価の方法を探る

東京学芸大学 成田 喜一郎

本シンポジウムは、今、国際理解教育の実践がいかなる方法で検証・評価されているのか、その現状と課題を踏まえ、評価はだれのためにあるのか、という本質的で根源的な問いを共有しつつ、これからの検証・評価はいかにあるべきか、具体的な試行・実践事例をもとに考えていくことをねらいとしています。

小・中学校、高等学校の具体的な試行・実践事例をもとに「話題提供」をしていただき、それをもとに参加された方々とともにワークショップ型の交流－共有・拡散・混沌・収束－共有－の場を設けていきたいと考えています。

その意味では、中心的なシンポジストは次の三人の方ですが、このシンポジウムに参加された方々全員がシンポジストであると言ってもよいでしょう。

●八代健志（やしろ・たけし）さん

（大阪府茨木市立三島小学校教諭）

現在、教職34年目、公立小学校5校目です。9年間、国立民族学博物館「博一学連携」プロジェクトの研究者として学んで来られました。今回、率直な日常の実践・評価について語ってくださいます。

●古家正暢（ふるや・まさのぶ）さん

（東京学芸大学附属国際中学校教諭）

24年間公立中学校教諭を経て、現在、国立大学附属学校で社会科を担当され、国際バカロレア・ミドルイヤーズ・プログラム（MYP）のもと、授業の逆向設計論的な実践と評価を行っておられます。

●石森広美（いしもり・ひろみ）さん

（宮城県仙台東高校教諭）

現在、公立高校で英語と中国語を担当され、20年弱、数々の国際理解教育の実践・研究をしてこられました。ここ数年、国際理解教育実践における「設計・評価」に関心を持ち、行ってきた実践研究を発表して下さいます。

目下、この3人の方々と成田（コーディネーター）が、メーリングリストを通じて、プロフィールや問題意識の交流を進めています。

当日、若い世代の方々を含め、多くの参加者＝シンポジストのご参集を頂き、国際理解教育におけるこれからの評価のあり方と方法を紡ぎ編み出していきたいと考えています。

大会シンポジウムC

シティズンシップから シティズンシップ教育へ

同志社女子大学 藤原 孝章

シンポジウムの分科会で、シティズンシップ教育を取りあげた理由は、国際理解教育学会では、すでに、特定課題研究として「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(紀要17号)があり、すぐれた成果をみている。

今回のシンポでは、特定課題研究の問題意識を一步すすめて、「学習の課題としてのシティズンシップ教育」を取りあげることにした。次代を担う若手研究者による提案と議論によって、プロジェクト研究の深化と国際理解教育の新動向を探っていきたい。

登壇者は、川口広美(日本学術振興会特別研究員)、北山夕華(名古屋大学)、坪田益美(東北学院大学)、橋崎頼子(奈良教育大学)の4名(敬称略)を予定している。

いずれもイギリス、カナダなどの外国のシティズンシップ教育を研究の出発点としており、カリキュラムや学習内容論、方法論の視点からの日本の国際理解教育への提案を期待している。



教育学部A棟・C棟

特定課題研究

文化的多様性と国際理解教育

早稲田大学 横田 和子

当プロジェクトでは、2010年より「文化的多様性」という概念を軸に、国際理解教育における課題と可能性について検討を重ねてきた。文化的多様性という非常に広範な概念を扱うに際し、当プロジェクトが焦点化したのが「身体性」と「場」の概念である。私たちは必ずある場を占拠する「からだ」として存在している。その「からだ」は、当然のことながら知性はもちろん、感覚、言語と非言語、意識と無意識などを同時にあわせもつ存在であるから、知性のみ、言語のみ、意識のみに働きかけるのではなく、「まるごとのからだ」によって学び、またその場における文脈や他者との葛藤のなかで、自らや全体が変容する学びのあり方が求められる。場と身体というチャンネルは、出会うはずのないものを出会わせ、溶け合うはずのないものの変容を促す可能性を持っているのではないか。

大会では生命科学、心理学、文化人類学といった領域から文化的多様性を捉え直す理論研究、学校や地域の現場から見えてくる、多様性を前提とし、差異を活かすことが自己や他者とのかかわりや、社会の変容につながるアプローチについての実践研究、また両者の橋渡しとなる方法論の問い直しといった観点から、これまでの研究成果を報告し、会員との議論を深めていきたい。ことばや論理や知識の積み重ねだけでは捉えきれないもの、とりわけ身体知や場における生命のふるまいと、文化の伝承・創造、また文化への参加ということは深くつながっている。これまでも国際理解教育において文化の扱いはとかく「キレイゴト」に落ち着きがちであるという指摘がなされてきたが、文化をめぐる学びがますます重要性を増す今日において、当たり前なことでありながら見過ごされがちな点にこだわりつつ、国際理解教育をめぐる学びの展望を示すことができればと願っている。

4 学会連携公開シンポジウム報告

4 学会連携公開シンポジウムに参加して

お茶の水女子大学大学院 福山 文子

2011年11月23日、「多文化社会を担う人づくり～学会連携への期待～」と題された、4学会連携公開シンポジウムが明治大学駿河台キャンパスにおいて開催された。4学会とは、異文化間教育学会、日本語教育学会、日本国際理解教育学会、日本コミュニティ心理学会であり、異文化間教育学会が創立30周年記念事業として主催し、これらの学会が連携し、公開シンポジウムとして開催されたものである。当日のプログラムは、基調講演、パネルディスカッションⅠ、パネルディスカッションⅡという3部から構成されていた。基調講演は、「時代の変革を担う社会起業家の育成～被災地での新たな担い手育成～」というテーマで、NPO法人ETICの事業統括ディレクターである山内幸治氏と、2011年3月中旬より現在に至るまで、つなプロ（東日本大震災による被災地・被災者に対する支援を行うことを目的とし（特）せんだい・みやぎNPOセンターと様々な分野の専門性をもつ全国のNPOが連携し、立ち上げたプロジェクト）気仙沼エリアマネージャーとして当該地域の復興に尽力している川崎克寛氏が、東北で行われている人材育成の取り組みなどを中心に語られた。3月11日の東日本大震災以降行われている震災復興の取り組みや、活動を担うリーダー育成のビジョンなど、現在進行形の活動を含め、貴重な話を伺うことができた。

つづくパネルディスカッションⅠでは、各学会を代表する講演者である、門倉正美氏（日本語教育学会）が「日本語教育の社会貢献とは？」、本学会の多田孝志氏が「平和で希望ある未来をつくる」、箕口雅博氏（日本コミュニティ心理学会）が「連携と協働にもとづく人づくりーコミュニティ心理学の貢献」、佐藤郡衛氏（異文化間教育学会）が「社会づくりへの挑戦ー関係性のくみかえを通して」という題目で、10分ほどの短い時間のなか、それぞれの学会

が目指すものを分かりやすく示された。特に印象的であったのは、地域日本語教育がいまだにボランティアにほぼ全面的に頼っている現実や、シャドーワーク化の克服といった、意欲と善意にあふれた人材が、ともすれば燃え尽きてしまいかねない現状についてのものであった。

最後に、パネルディスカッションⅡでは、春原憲一郎氏の和やかな司会に導かれ、中山京子氏、工藤和宏氏、藤後悦子氏、金孝卿氏という若手研究者の方々が、具体的な体験や、関心を通じた話題を会場に提供された。中山氏は、「移民は先住民からみると『土地を侵略する集団』でもある」と述べられた。持ち前のバイタリティで先住民と深く関わる取り組みをされていればこそその発言と感じた。また、工藤氏は、「ヒューマンライブラリー」という意欲的な取り組みについて、分かりやすく伝えられた。その活動に対し、あらためて関心を持つとともに、大きな可能性についても再確認することができた。また、藤後氏からは、デンマーク人ならば一度は入学するという大人のための学校である、「フォルケホイスコーレ」についての紹介があった。共同生活をしながら、多様な背景を持った人々が生の言葉で語り合う学びの場であるとのこと。なんと魅力的な環境であろうと驚かされた。金氏は、日本在住15年の経験を通し、特に3.11以降戸惑いながらも、ご自身が外国人として日本に居続ける意味を自問自答しつつ、当事者として社会とつながり発信していくことについて、真摯に語られた。

今回参加させていただいた4学会が連携するという壮大なシンポジウムは、非常に刺激的で、学びにあふれたものであった。残念ながら、ネットワーキング懇親会には参加できなかったが、この充実した時間を与えて下さった主催者の方々、また登壇された先生方に感謝の思いで一杯である。



講演する多田孝志先生



中山京子先生と司会の春原憲一郎先生

韓国国際理解教育学会大会の報告

近畿大学 服部 圭子



第三分科会での自由研究発表

2011年11月12日（土）～11月13日（日），韓国国際理解教育学会第12回学術大会がソウル大学およびAPCEIU（アジア太平洋国際理解教育センター）にて開催され，日本からは8名の会員が参加した。

私は，例年は共同研究者らと仁川空港に到着するが，今年は独りで初めての金浦空港に降り立った。不安で一杯の時，日本語が堪能な韓国の方が乗るバスを親切に教えてくださったことを契機に，車中色々話をした。世界中を飛び回って仕事をするその方も，10年間の日本滞在中，アパート探しが難しく親しい友人ができないという経験をされたと聞き，滞日外国人の現状についてあらためて考えさせられた。タクシーに乗り換える折にも，力を貸して下さる方々に複数出会い，温かい気持ちになった。そんな旅の始まりだった。

本大会のテーマは「危機社会と国際理解教育」（Risk Society and Education for International Understanding）であった。大会の流れは以下のとおりである。

11月12日（土）ソウル大学220棟

- 9：00－9：30 受付
- 9：30－12：00 自由研究と事例発表
- 12：00－13：30 昼食
- 14：00－14：50 開会式
- 15：00－17：00 シンポジウム
- 17：00－18：00 総合討論
- 18：00－18：10 閉会式
- 18：30－20：00 懇親会

11月13日（日）アジア太平洋国際理解教育院3階大講堂

10：00－12：00 ワークショップ

1日目午前の自由研究発表は6つの分科会に分かれて行われ，日本からは5本の発表があった。私は第3分科会（日・韓・中

の相互理解と国際理解教育）で，韓国国際理解教育学会副会長の韓健洙氏とともに発表した。これは，大津和子学会長の指揮のもと，研究者や実践者が「食文化」「人間関係」「人の移動」チームを組んで進めてきた日韓中共同教材開発プロジェクト関連の発表である。平成23年度は研究の最終年でもあり，発表後は参加者間でプロジェクト全体を振り返る話し合いを行った。3年間の協同作業のプロセスそのものが互いの国際理解教育の現場の特徴を学ぶ機会となり，相互理解促進のために有効であったことが確認された。一方で，各々の国の実情に合わせて実践を工夫する課題についても議論し，今後の発展を祈願した。

午後には「危機社会と国際理解教育」というテーマでシンポジウムが行われた。藤原孝章学会副会長は，「危機の二重性と時事問題学習－国際理解教育の視点から－」という題で，危機社会の課題を時事問題学習として捉える提案をした。釜田聡会員も指定討論者として登壇した。東日本大震災発生時に仙台におられた庾喆仁氏からは，‘East Japan Earthquake and Education for Sustainable Development’に関する発表があったが，生活者としての外国人の視点からの体験に基づくレポートで，多文化化する社会における危機管理の在り方の検討を迫るものであった。

2日目のワークショップ「国際理解教育とストーリーテリングの方法論」では，横田和子会員がモンゴル民話などを例に，「物語と日常をつなぐ：子どもと大人のための民話の活用と国際理解教育の可能性」を発表し，リスクコミュニケーションの難しさや，身体の内部に蓄積されていく経験の大切さに言及した。

大学内レストランでの懇親会，タイ料理店での2次会，2日目の昼食会などを通して歓待を受け，参加者一同，活発な議論や情報交換，冗談等を楽しみ親交を深めた。韓国滞在中には，大学院時代の友人や知人ご夫妻との再会も楽しんだ。さまざまな素晴らしい出会いに感謝するとともに，今後も日韓の学会交流が深まり発展することを願っている。



シンポジウム後の記念写真

特定課題研究プロジェクト報告

「文化的多様性と国際理解教育」

早稲田大学 横田 和子

前回のニュースレターで既報の通り、当プロジェクトでは昨年秋より連続公開講演会・研究会を企画し実施してきた。公開講演会では、昨年9月に詩人・比較文学研究者の管啓次郎先生をお招きしたのを皮切りに、11月にはジャワ舞踊家・佐久間新さんを、1月には作曲家・共同作曲実践家・鍵盤ハーモニカ奏者の野村誠さんをお招きしてのワークショップを行った。また、公開研究会では、河野英樹会員・小林亮会員・南美佐江会員・祐岡武志会員らが話題提供を行い、それぞれの専門の立場から、文化的多様性と国際理解教育をめぐる、理論および実践面からの問題提起を行ってきた。

ここでは紙幅の都合から、作曲家の野村誠さんが行ったワークショップについて簡単に紹介することにした。1月14日、聖心女子大学グリーンパーラーにて行われた同ワークショップには、会員・非会員あわせて15名ほどが参加した。野村さんはこれまで、海外のアーティストや子どもたちとのコラボレーションも沢山されてきている。そこで、そうした経験から、文化的多様性とは何ぞや、というお話をスタートされてもよかったのだが、あえてそれをせず、実際に参加者で音を出してみる、ということからワークショップはスタートした。メインとなったのは、野村さんが実践されている即興による共同作曲「しょうぎ作曲」であり、そこでは参加者の緊張感とゆるさが不思議にないまぜとなった聴いたことのない音楽がつむぎだされていった。(ホワイトボードを相手に踊りだす人もいた。)また、野村さんが行っている、イギリスと宮城県の市民の共同制作による創作オペラづくりの経験をもとに、参加者で歌作りの実践も行った。(世話人のモンゴル語と、非会員の方のイヌイットのことばを用いて、参加者がただ耳に聞こえてきた音だけを取り出し＝意味は無視し、再構成し、日本語の歌詞にしていき、メロディーをつける...という多言語ことば遊びによる歌づくりである。)こうしたワークによって、初対面の人でも何人か参加しているなかで、よく知らない人間同士でも、難しい説明なしに、共同による音楽がおのずと「生まれてきてしまう」。この一連のプロセスは、理解できないものやこと存在、あるいは、参加者それぞれのできることやできないことがばらばらであることこそが、創造の立ち上がりが必要であり、また創造の源泉となりうることを示している。野村さんは、こういうことをしていると、「文化的多様性」は、どうしても現れてきてしまうもの、にじみ出てしまうもの、そうなるもの、そうならざるを得ないものであるとおっしゃっていた。こう

した実践は、参加者にとって後々何かの役に立つという学びではない。ハタから見れば、ほとんど遊んでいるようにしか見えない実践かもしれない。だが、そうした遊びそのもののなかに喜びがあり、他者や社会とのかかわりがあり、また自己や世界に対する発見や気づきを見出せるもの(見出さずにはおかないもの)なのではないだろうか。その場・その時の文脈や、ひとりひとりの参加者の存在そのものの「違い」を活かす野村さんの手法を体感できたことは、文化的多様性と国際理解教育を考える上で、参加者にとっても大いに刺激になったのではないだろうか。

共生社会の構築という課題を前に、文化的多様性の重要性を否定する人はあまりいないだろう。だが、文化的多様性というコトバや概念を用いることなく、文化的多様性を教える、あるいは学ぶ機会を作り出すことは、教師や学習援助者のメタスキルに関してくるはずである。3回のゲスト講師はいずれも豊かなメタスキルの持ち主であった。文化的多様性という概念そのものに何か重要な意味があるわけではなく、多様な文化に対するふるまい、たたずまい、尊重の仕方、寛容のありかたといった、諸々の実践的な身体知・暗黙知の重要性を、彼らは伝えてくれたと思う。

これまでの三回の公開講演会・研究会は、いずれも半日に講演会と研究会のダブルヘッダーをこなすという強行スケジュールになったが、講師や会員諸氏の協力のもと、無事に会を終えることができた。ここで改めて参加者の皆様に感謝申し上げる。公開講演会・研究会は、上記を以って一旦打ち止めとし、今後は7月の学会大会報告に向けての調整を行っていく予定である。引き続き、皆様からのご協力をお願い申し上げたい。



作曲家・野村誠さんを囲んでのワークショップ(於聖心女子大学)

特定課題研究プロジェクト報告

「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」

同志社女子大学 藤原 孝章

2011年度から3年間の課題研究として出発した。研究メンバーは、代表者も含めて12名と多く、かつ学校現場の教員が多い(12名中7名)のが特色である。研究の目的は、学校特別活動や大学生研修、教員研修、NGOのオルタナティブな旅行としての海外研修・スタディツアーについて、国際理解教育の視点から、その目的やねらい、研修プログラムのあり方などを議論し、内容論、学び論としての成果をみようとするものである。

大人数のメンバーのため、初年度は、研究発表を通して、研究内容および領域の協議を行い、研究の枠組みや研究組織体制を決めていくこととした。

そこで、研究メンバーを関西と関東(北海道も含む)にわけて、公開研究会を行なった。

第1回公開研究会 2011年11月27日(時間:1230-1630,
会場:同志社女子大学)

発表とテーマ

1. 松井克行(大阪府立旭高等学校)「イギリス高校短期語学研修の学びについて」-ELAC主催の「英国国際ナショナルプログラム」の場合-
2. 橋崎頼子(同志社大学・関西大学非常勤講師:発表当時)「双方向の学びを目指すスタディツアーの事例-神戸,チェンマイYMCAのタイワークキャンプを通して-
3. 織田雪江(同志社中学校・高等学校)「スタディツアーの構成と成果について考える-『アジア国際夏期学校』の取り組みから-
4. 藤原孝章(同志社女子大学)「「海外子ども事情」タイ・チェンマイ編-スタディツアーと学習者の学びの構成-
5. 山中信幸(柳学園中学校・高等学校)「JICAのプログラムである「教師海外研修」の意義とその活用」
6. 金田修治(大阪府立三島高等学校)「スタディツアー

における教師の学びと国際理解教育への実践-参加したスタディツアーの比較考察-

7. 中山京子(帝京大学)「戦争の記憶をめぐるスタディツアーに多様な視点をどう組み込むか-グアム・スタディツアーを事例に-

第2回公開研究会 2011年12月18日(時間:1230-1630,
会場:東京学芸大学附属世田谷小学校)

発表とテーマ:

1. 堀幸美(江別市立大麻東小学校)「タンザニアスタディツアーからの教材-小学校での実践-
2. 居城勝彦(東京学芸大学附属世田谷小学校)「パールハーバーワークショップでの学びを生かした中学校音楽科の活動」
3. 藤原孝章(同志社女子大学)「タイ・スタディツアーにおける構成的学び-同志社女子大学授業科目「海外子ども事情」の場合-
4. 中山京子(帝京大学)「多様な視点をどう織り込むか:グアムスタディツアーを事例に」
5. 大滝修(茨城県立取手松陽高校)「カンボジア・スタディツアーと協同ゼミナールについて」
6. 栗山丈弘(文化学園大学)「国際観光動向を踏まえた海外スタディツアーの今日的意義」

以上の発表をふまえて、両会場において研究の枠組みを協議し、A.参加者の学び論・まなざし論、B.教師による教材化論、C.ツアー企画 プロダクション論、D.ホストコミュニティとの関わり論、という4つの研究枠組み、アプローチを抽出し、来年度からの研究活動に生かしていくことになった。また、研究課題に関する参考図書を紹介もあり、春休みの宿題とされた。

全国各地の研究会からの報告

全国各地の国際理解教育関連研究会の紹介

目白大学 多田 孝志

全国各地には国際理解教育に関わる多様かつ優れた実践研究を展開している研究会が多々ある。本項では、国際理解教育の実践研究の参考としていただくため、それら研究会の概要を紹介する。

○北海道国際理解教育研究協議会

本会は、21世紀を生きる北海道の子どもたちに、国際社会に貢献できる日本人としての資質を育成する国際理解教育の在り方を探る北海道の教員の会である。会の活動の柱として、授業を掲げている。授業を通して子供の育ちを語ることをモットーに、毎年全道大会を開催し、公開授業と課題別分科会を通して研究の交流を行っている。また、北海道を17ブロックに分け各地の研究成果を交流し北海道の国際理解教育の向上に努めている。現在「自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童生徒の育成」を研究主題に掲げ研究を進めている。小学校外国語活動に関しても、各地区の研究や研修をもとに実践を積み、よりよい外国語活動の進め方を探っている。

(札幌市立清田小学校白石邦彦)

○宮城県高等学校国際教育研究会

本会は、県内の高校生の国際理解・協力を推進する会であり、県教育委員会所管の研究会の一つである。昭和35年に海外移住研究会として発足し、変遷を経て昭和60年に標記研究会として新発足し現在に至る。県内ほぼ全ての高等学校が加盟している点が特徴であり、高校生対象の国際理解研修会や国際理解に関する弁論大会の他、教員研修会(実践研究発表や講演会、ワークショップ)も企画・運営している。また、この上位組織として東北地区国際教育研究協議会、全国国際教育研究協議会があり、全国の加盟校は2500校を超える。県内外に国際教育を推進する高校教師のネットワークを構築できる点が最大の利点である。

(宮城県仙台東高等学校 石森広美)

○SPUnivNet (ユネスコスクール支援大学間ネットワーク)

国連ESDの10年において、学校現場でのESDの推進役であるユネスコスクールの加盟拡大、実践向上が求められたことから、2008年に8大学が参加したASPUnivNetが創設された。ASPUnivNetでは、ユネスコスクール支援として、①学校のユネスコスクール加盟申請の支援、②ユネスコスクールの活動の質の向上を目的とした知的支援、③国内外のネットワーク形成、④地域の教育機関との連携促進の4つの活動を行っている。特にアジアのフラッグシ

ップ・プロジェクトの構築に向けて「お米」を中心にした国内外の学校間交流の推進を図っている。2011年度からは奈良教育大学が事務局を引き継いでおり、加盟大学数も17大学となった。奈良市内の学校では奈良教育大学と提携し、世界遺産をテーマとした実践研究が展開されている。

(奈良教育大学 中澤静男)

○島根県国際理解教育研究会

国際理解教育に関心をもち実践する教職員が集まり、平成7年に発足した研究会である。英語教育・日韓授業・対話力育成の三つの研究領域を設け、活動している。授業研究会を中核に置きながら、講演会や夏季研修会の開催など、会員以外にも広く情報発信している。数年おきに県レベルの研究大会も開催し、平成24年10月には第9回研究大会(兼中国ブロック国際理解教育研究大会)を開催する予定である。現在、多田孝志前学会会長の指導を受けながら「21世紀を生きる子どもたちの対話力をどう育てるか」に視点をあて取り組んでいる。また、本会の特色として、島根県が取組む竹島に関する学習において、授業実践をとおして各方面に情報発信している。

(出雲市立伊野小学校 山口修司)

○福岡県筑後地区国際理解教育研究会

福岡県筑後地区小・中学校の在外教育施設派遣教員が連携し、「変化が激しい国際社会において、子ども自身が事象や人々とのつながりを見つけ、異質な文化をもつ人々と共生し、諸問題を解決しながら、共生していくための資質や能力の育成」を、どのように図ったらよいかを解明しようと、平成三年発足した。「世界の人々と共に よりよく生きる子どもを育むために」をテーマに掲げ、発足以来、毎年、研究協議会や地区大会を開催してきている。実践研究を重視し、小学校外国語活動・道徳・各教科の学習に国際理解教育の視点を生かす授業に取り組み、検証をすすめている。

(立御原小学校 井手登士昭)

紙幅に限りがあり、本稿では紹介できなかったが、全国各地には、地域の特性を生かし、さまざまな国際理解教育の実践研究に取り組んでいる研究会がある。本学会の実践研究委員会では、全国各地のさまざまな実践研究の成果を統合し、国際理解教育の実践の意義や方向を明らかにすることを目指している。

『現代国際理解教育事典』 編纂記

帝京大学 中山 京子

本学会は2011年に設立20周年を迎え、その記念事業の一つとして『現代国際理解教育事典』の出版が企画され、理事会の決定により多田孝志、大津和子、藤原孝章、森茂岳雄、中山京子が編纂委員となった。国際理解教育に携わる専門家や指導者だけでなく、さまざまな研究分野の実践・研究者、広く一般の方々にも活用されることを願って、学会総力を挙げて編集を進めてきた。編纂にあたり、以下の5点を意識した。

- ①国際理解教育の実践・理論に関わる項目を、最新の学問的成果を踏まえ、多様な視点からできるかぎり広く取り上げ掲載する。
- ②単なるキーワードの一般的解説でなく、国際理解教育としての視点や意義を記述する。
- ③学問的な刊行物としての水準を保つために、内容の質の高さ、表現的確かさ等についての検討を重ねる。
- ④実践者が多い学会の特色を生かし、代表的な実践も取り上げて解説を加え掲載する。
- ⑤国際理解教育に関連する機関、NGO/NPOの組織や活動についても紹介する。

執筆者については学会員に限定し、執筆活動を会員の研鑽と識見の深まりの機会にすることとし、項目リストを会員に公開し執筆希望の項目を選んでいただいた。これらに、編纂委員会から執筆を依頼した項目とあわせて、執筆者は100名に及んでいる。

二年以上を費やした編纂作業は、採用すべき項目の取捨選択・執筆者の選定など、いくつかの困難を抱え、時間をかけて編纂会議を重ねた。明石書店の大江雅道氏からは、「事典を刊行することの学会としての責任と記述内容の責任」が求められることを指導いただくことで、編纂委員会としてその任を負っていることを改めて自覚した。各項目について内容の質の高さ、文章表現的確かさ等を検討し、関連項目における内容重複の解消など、改善していくこと



各項目について皆で目を通し、議論をつづける。
深夜まで続くこともしばしばであった。

は厳しい作業であった。全項目を各編纂委員が繰り返し査読し、何回となく執筆者と連絡を取り合い、ひとつ、またひとつと完成度の高い項目にしていった。この過程において、執筆者の皆様には、改稿、加筆、修正、削除などに協力いただき御礼申し上げるとともに、時には不本意な思いをされたことにお詫び申し上げる次第である。当然、編纂委員による原稿についても、委員同士の緊張を伴う厳しい議論があり、何度も書き直しをすることとなった。さらに、出そろった全項目について、学会刊行の事典としてのレベルの高さを求めて、最終段階でさらに検討を加え、真摯かつ峻厳な編纂作業を行ってきた。編纂の全プロセスを振り返り、本事典は単に力量ある執筆者への依頼原稿を束ねただけのものではなく、希望する会員に執筆参加へのチャンスがあり、そして深く吟味されたものであることを、編纂委員会として自負している。

ここに編纂会議の開催日を報告する。会議の前後には、皆様の執筆エントリーや執筆、改稿作業があったこと、編纂員会内のメール上での膨大なやりとり、原稿の束を抱えての出張があった。限られた時間の編纂会議では、常に食事や睡眠の時間を削り、明け方までホテルで議論・作業をすることを繰り返した。

こうした編纂事業を支えたのは、平成23年度本事業に助成をいただいた(財)公文国際奨学財団からの助成金100万円である。編纂会議は、理事会、科研会議、学会大会など委員の複数が参加する会議と同時に設定し、極力出費を抑えるようにし、刊行後の事典買い取りにあて、執筆者の皆様への埼玉大会会場でのご献本を予定している。執筆された方も購入希望の方も、本年度の埼玉大会で『現代国際理解教育事典』を手にとることを楽しみに参加されたい。

<事典編纂会議の記録>

2010年4月11日	事典編纂企画準備
2010年6月19日	会員配布文書草案づくり
2010年9月26日	項目検討および執筆者調整
2010年12月12日	執筆者調整
2011年3月19日	原稿ひな形検討
2011年5月14日	執筆者再調整
2011年6月19日	作業確認
2011年8月3・4日	第一次原稿検討
2011年10月2日	明石書店と会合 レイアウトや装丁についての検討
2011年10月23・24日	第二次原稿検討
2011年12月17・18日	第三次原稿検討
2012年1月27・28日	第一次ゲラ・索引検討
2012年3月10・11日	第二次ゲラ検討
2012年4月14・15日	第三次ゲラ検討

国際委員会企画のお知らせ

持続可能性（サステナビリティ）を学ぶ カンガルー島スタディツアー参加者募集

聖心女子大学 永田 佳之

〈持続可能性〉を体感するスタディツアーをオーストラリアのカンガルー島で開催します。手つかずの大自然の中で地球環境や自然と人間との関わりに想いを巡らし、島内のサステナブルな実践から、3.11後の日本の住・食農・エネルギー・教育について考えるヒントを得ます。一般の観光ではなかなか体験できないプログラムです。ふるってご参加下さい。

主催：日本国際理解教育学会

日程：2012年8月16日～23日（予定）

訪問地：オーストラリア（南オーストラリア州アデレード市及びカンガルー島）

趣旨：地球温暖化などさまざまな環境問題が問われる中、サステナブルな生活様式や産業で注目されているカンガルー島のエコハウスを拠点に、持続可能性についての講義を受け、現地の人々と生態系についてのフィールド調査を行い、ユネスコ等の推進するESD（持続発展教育／持続可能な開発のための教育）を体験的に学びます。

費用：学会一般会員245,000円／学会学生会員235,000円
学会非会員（社会人）255,000円／学会非会員（学生）245,000円

※学会会員以外の方も参加可。上の費用には旅行保険代及び日本国内での旅費は含まれません。宿泊タイプ（シングル／ツイン）や航空券の燃油チャージの時価等によって費用が若干変動することもあります。

参加条件：環境問題や持続可能な発展、ESDについて関心を持ち、日常英会話程度のコミュニケーション力のある学会員及び非会員。必要な場合は要所で通訳がつきます。

定員：15名程度（定員に達し次第、締め切らせていただきます）

申込：同封の参加申込書に必要事項を記入の上、6月10日までに永田（yoshy@pobox.com）までメール添付又はファックス（03-3407-5914）にてお



写真：カンガルー島での散策

申し込み下さい。申込書は学会ホームページからも入手可です。

問い合わせ：永田佳之（日本国際理解教育学会理事／聖心女子大学教員／スタディツアー世話人）



写真：エコハウスでの生態系に関する講義

★現地プログラムの内容

アデレード市内の観光地（歴史博物館等）、カンガルー島内のESD・環境教育実践校の見学、野生イルカ及びアザラン等の観察、有機酪農場見学、自然保護地区でのレンジャーによる案内、平和教育及びESDの専門家のB. ティーズデイル氏による講義、サステナブル・ハウジング（再生エネルギー等）の見学、有機ワイナリーの見学等。

さらなる旅程の詳細は次頁を参照願います。学会ホームページからもご覧いただけます。

カンガルー島スタディーツアー 主なアクティビティ(予定)

日 程		2012/8/15(水) - 8/23(木)	滞在先
1日目	8/15(水)	成田空港 出発 シンガポール又はシドニー経由でアデレードへ移動	アデレード市 内のホテル
2日目	8/16(木)	アデレード 到着 ホテルへ移動 移民博物館及びアデレード大学等の見学 <市内自由観光>	同上
3日目	8/17(金)	アデレードからバス及びフェリーにてカンガルー島へ エコハウスへ移動 エコハウスでのウェルカムランチと講義	カンガルー島 内の民宿
4日目	8/18(土)	フリンダースチェイス国立公園にてサスティナブル・ ツーリズムの体験的学習 野生アザラシの観察	同上
5日目	8/19(日)	ボート上でのイルカ観察 野生イルカの生態系に関する講義 サスティナブル酪農業の見学	同上
6日目	8/20(月)	島内の環境教育/ESD実践校の訪問 地元の教師と生徒との交流 サンセット・ワイナリー訪問	同上
7日目	8/21(火)	キングスコート等の自由観光 学びの成果の報告会 フェアウェルパーティー	同上
8日目	8/22(水)	国内便にてアデレードへ移動 アデレードからシンガポール又はシドニー経由で東京 へ	機内泊
9日目	8/23(木)	成田空港到着	

※上記プログラムは2012年4月現在での予定です。一部の内容変更もしくは順番が変更となる場合がありますので、ご了解下さい。なお、滞在期間中、カンガルー島で開催予定の「カンガルー島生物多様性コンファレンス」に部分的に参加する可能性があります。

2011年度理事会（各委員会等）報告

研究委員会より

椋山女学園大学 宇土 泰寛

1. 研究委員会の報告

研究委員会では、現在の教育状況の中で、国際理解教育学会の研究上の課題の推進を進めています。特に、特定課題研究プロジェクトの推進を図っています。

第20回研究大会で、「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（代表：嶺井明子）として研究成果を発表し、学会紀要第17号に特集として掲載されました。そして、2011年6月の第21回研究大会で、「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」（代表：永田佳之）として研究成果を発表し、学会紀要第18号への掲載に向けて進んでいる段階です。更に、2012年度の第22回研究大会での特定課題に向けて、「文化的多様性と国際理解教育」（代表：横田和子）が進行中です。また、2013年度の研究大会へ向けて、「海外研修・スタディーツアーと国際理解教育」（代表：藤原孝章）も2011年6月の総会からスタートしています。

2. 研究委員会の動向

(1) 12月17日（土）

研究委員会の今後の課題と特定課題の進行状況の検討を行いました。

- ①永田プロジェクトの提出原稿
- ②現在進行中のプロジェクト
- ③2012年度開始のプロジェクトの公募
- ④今後の課題研究の在り方

(2) 1月9日（月）

学会紀要第18号の特集になる「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」（代表：永田佳之）プロジェクトの原稿について検討しました。

- ①永田特定課題の査読と検討

永田特定課題への要望と原稿配分の再調整
研究紀要特集タイトルの検討

編集委員会への最終原稿の提出期限

- ②今後の特定課題の学会紀要へのまとめ方
共同研究としてまとめ、45ページ2段組みの構成で、9月末研究委員会に提出、「査読あり」で進める方向を話し合いました。

3. 特定課題研究の再募集

2012年度にスタートする特定課題研究プロジェクトを募集していましたが、3月締め切りでは応募がありませんでした。再度ご検討をお願いします。

共通テーマは、「共生社会の構築と国際理解教育」で、期間は、3年間です。少額ですが、予算処置もあります。1年目10万円、2年目の大会発表年は20万円、3年目10万円の配分を予定しています。採択されたプロジェクトは、公開研究会などを積み上げて、研究大会時に特定課題研究としてその成果を公開し、それを学会紀要に特集としてまとめます。プロジェクトメンバーの中に本学会の理事を最低一人は含めることになっています。

紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

1. 学会紀要『国際理解教育』Vol18の編集作業について

現在、査読体制を組んで、編集作業に入っています。特定課題研究プロジェクトを除いて、投稿原稿は23本でした。ちなみに、紀要15号では24本、16号では15本、17号では21本の投稿でした。23本のうち、特集テーマに関しては自由投稿が1本ありました。一般テーマ22本の内訳は、（研究14、実践5、実践研究ノート3）ありました。

査読の結果、掲載予定は、研究4本、実践研究ノート3本となりました。今回新設した実践研究ノート

の 카테고리には優れた実践を投稿していただきました。さらに、全体的にみて、ページ数の制限から掲載できなかったものの、研究、実践論文ともに質の高いものがあり、よい論文も見送らざるをえないものがありました。編集委員会としては忸怩たる思いしております。カテゴリーの誤認による投稿もあり、投稿を考えている会員は、投稿規定をよく読まれることをすすめます。さらに、今回あらたに加えられた「国際理解教育との関連」の査読観点にも留意され、国際理解教育としての意義づけのある論文をお願いする次第です。

なお、特定課題研究の投稿論文については、研究委員会において査読を行なっています。

理 事 会 よ り

文化学園大学 栗山 丈弘

2011年度第2回の理事会が2011年12月17日に文化ファッションインキュベーション（東京都渋谷区）にて開催されました。大津会長、藤原副会長をはじめ、14名の理事と事務局1名を含め15名が出席しました。

主な議題は、第22回研究大会について、国際委員会のあり方、公文国際奨学財団への助成申請などの審議事項と、各委員会からの報告などの報告事項等でした。各委員会の報告に関しては、委員会報告の欄をご覧ください。

まず、審議事項の1点目、第22回研究大会（埼玉大学）の開催日程は、昨年の東日本大震災とその後の電力需給問題により関東の大学の学年暦は見直しを余儀なくされましたため流動的となっておりました。これが正式に7月15日（日）－16日（月・祝）に決まり、ミニシンポジウム3本を企画しているとの内容も承認されました。実行委員長の桐谷正信理事には、調整にご尽力いただきましたこの場を借りてお礼申し上げます。

審議事項2点目として2012年度よりスタートを予定している国際委員会からは、次年度のスタディツ

ア一等の企画の実施にむけたガイドライン提案され承認されました。審議事項3点目として昨年に引き続き、公文国際奨学財団の「平成24年度国際教育振興助成事業」に申請することが承認されました。現在編纂している『現代国際教育事典』は本助成金を活用しています。尚、24年度の申請の具体的な内容については、申請期限までに会長、副会長を中心に検討していくこととなりました。審議事項4点目として、新入会員申込者3名の入会が承認されました。

報告事項として韓国理解教育学会の参加報告、異文化間教育学会主催の学会連携シンポジウムの参加報告、会員名簿の作成状況報告、日本学術会議協力学術研究団体の登録の4点がなされました。

今年度の韓国国際理解教育学会の研究大会は、11月12～13日にわたりソウル大学を会場に開催され本学会会員8名が参加しました。シンポジウム「危機社会と国際理解教育」では藤原副会長がシンポジストとして、釜田理事が指定討論者として登壇しました。2日目のワークショップ「ストーリーテリングと国際理解教育」では、横田和子会員が登壇されたほか、5名の会員が自由研究発表を行ない、活発な交流を行ない手厚いもてなしを受けたとの報告がなされました。

異文化間教育学会主催の学会連携公開シンポジウム「多文化社会を担う人づくり」が11月23日に明治大学を会場に開催され、本学会を代表し、多田理事、中山京子理事が登壇され、異文化間教育学会、日本語教育学会、日本コミュニティ心理学会の代表者と交流を深めたとの報告がなされました。

会員名簿の作成に関しては、12月初旬にニューズレター39号やE-mailを通じて会員に協力呼びかけをスタートさせており、2012年4月までに完成、会員に配布するとの予定が報告されました。

また、本学会は日本学術会議の協力学術研究に正式に登録され、日本学術会議および本学会双方のウェブサイトリンクが張られることが報告されました。

事務局通信

お知らせ—これからの行事／イベント案内

国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催

博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育」(予定)

国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。本年度で7回目を迎え、ますます充実してきております。是非ご参会ください。

日時：2012年8月7日(火) 10:20~17:00 (予定)

場所：国立民族学博物館 セミナー室および展示場

(大坂府吹田市千里万博公園10-1)

プログラム：<第1部>講演とミュージアムツアー

<第2部>ワークショップ

参加費：無 料

問い合わせ先：中山京子 (knakayam@main.teikyo-u.ac.jp)



寄贈図書

- 宇土泰寛著 『地球時代の教育—共生の学校と英語活動』創友社、2011年
- 金井香里著 『ニューカマーの子どものいる教室 教師の認知と思考』勁草書房、2012年
- 園山大祐編著『学校選択のパラドックス フランス学区制と教育の公正』勁草書房、2012年
- 桐谷正信著 『アメリカにおける多文化的歴史カリキュラム』東信堂、2012年

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。

新入会員

以下の3名の方が、2011年12月17日までに入会を承認されました。

氏名	所属
林 敏博	名古屋市立愛知小学校
見世 千賀子	東京学芸大学国際理解教育センター
山元 研二	南さつま市立万世中学校

事務局からの連絡とお願い

平成24年は理事選挙の年にあたります。選挙に関わり年会費の納入及び会員登録情報の変更届けの2点につき、ご協力をよろしくお願いいたします。

◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いただきますよう宜しくお願いいたします。

●会 費：正会員 8,000円 学生会員 4,000円 団体会員 30,000円

●郵便振り込み：口座番号 00120-5-601555 加入者名 日本国際理解教育学会

◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら、ファックス（042-327-8874）または、Eメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）でお知らせください。また、会員種別の変更もお知らせください。

◆会員名簿の配布につきまして

皆様にご協力いただき作成しております「会員名簿」がまもなく完成いたします。4月14日に予定されております常任理事会の後、4月16日頃から登録いただきましたメールアドレスに配信させていただきます。16日以降、届かない場合は、事務局栗山（kuriyama@bunka.ac.jp）まで、お問い合わせください。尚、この名簿は、作成に同意いただき情報を掲載された会員のみへの配布となります。

◆紀要『国際理解教育』バックナンバーの購入手続きについて

明石書店から発行されております16号、17号はお近くの書店にてご購入可能です。2号～15号までは、事務局にて販売しておりますが、在庫が僅少の号も出始めております。

ご希望の号数および冊数をファックス（042-327-8874）またはEメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）で事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

◆学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。英語版ページもできました。アドレスは次のとおりです。

【 <http://www.kokusairikai.com/> 】